

インターネットを通じた「心に残るつぶやき」の多言語化 ～prayforjapan.jp多言語翻訳プロジェクト参加者へのインタビュー分析を通じて～

遠藤 忍（慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科）

1. はじめに

まず、2011年3月11日に発生した、東日本大震災の被災によって亡くなられた方々のご冥福をお祈りすると共に、今なお様々な困難を抱えている被災地域の皆さまがいち早くもとの生活を取り戻し復興を果たすことを祈念する。同時に、広範囲に渡った大震災の被害と復興の記憶・記録、実際に行われた支援や対応のノウハウなどを、後世に残していくことが我々に課せられた使命であることを決意として述べたい。

本発表は、インターネットで投稿された「心に残るつぶやき」を多言語に翻訳していくという支援活動の課題と可能性を検討するものである。東日本大震災を機にソーシャルネットワークサービス(SNS)が情報伝達手段として多用され、多言語による情報提供も行われた。本発表では、その事例として「prayforjapan.jp」(以下、PFJ)の多言語翻訳を取りあげる。今回は活動の経緯を報告すると共に、参加したボランティア翻訳者に対して実施したインタビューを分析し、「心に残るつぶやき」が翻訳される過程について、短い日本語メッセージを多言語に翻訳する場合に生じる困難、翻訳ボランティアの体制の課題、翻訳ボランティア活動の意義という面から検討を行いたい。

2. 震災における多言語支援の必要性

2.1. 過去の震災における多言語支援の事例

かねてから日本においては、外国人との共生が課題となっている。定住外国人たちは、普段の生活でマイノリティとなってしまうだけでなく、緊急時においては支援の届きにくい弱者になってしまう。このことが顕著に現れたのが、1995年の阪神淡路大震災である。当時、被災地域には約10万人の外国人居住しており、外国人の死傷者は199人に上った(佐藤ほか, 2004)。

こうした、生活上での困難と精神的な不安が外国人を襲った状況のなかで立ち上がった活動例が、神戸市のFMわいわいである(金, 2012; 杉原, 1996)。震災から約10日以内で、長田区在住の在日コリアン向けのFM放送「FMヨボセヨ」が立ち上がり、母語での情報提供と不安の払拭を目的とした1日3回・日本語と韓国・朝鮮語の2言語放送が行われた。一方、長田区にはベト

ナム人居住者も多く、彼らの支援を目的とした「被災ベトナム人救援連絡会」が1995年4月に「FMユーメン」を開局し、ベトナム語に限らず6つの言語で生活情報を放送した。この両局は共同行動をとりつつ地域に根付き、最終的にコミュニティ放送「FMわいわい」として正式な認可を受けた。以後、8カ国語による多言語放送を通じて、地域の多文化共生の担い手となっている。

一方、阪神淡路大震災以後、緊急時における情報提供のあり方について議論がなされた。佐藤(1999)は「外国人被災者の多くが日本語も英語も十分に理解できな[かった]」ことを指摘し、震災後72時間のラジオ放送の内容分析に基づいて、「外国人にも伝えるべき情報」67種類を提示した。佐藤(1999)は、これを「非日本語話者にも分かってもらえる日本語表現で」提供するべきとしている他、佐藤ほか(2004)はこれらを応用した多言語防災情報翻訳システムを提案している。

2.2. 東日本大震災における多言語支援活動の実例

外国人を取り巻く震災時の言語的課題は、東日本大震災でも発生していたといえる。被災県には多くの外国人が居り、2012年3月末段階で、その数は約22万6000人に上る¹。関東地方でも交通やライフラインが混乱し、また原発事故により、定住外国人のみならず、内外の多くの外国人に不安と混乱が生じた。

こうした震災当時の状況のなかで、外国人向けの情報提供が数多く行われた。例えば仙台国際交流協会は「仙台市災害多言語支援センター」を運営し、ラジオ放送や避難所巡回のほか、職員や「災害時言語ボランティア」たちの手で、インターネットを用いて災害情報を翻訳・発信するという活動を行った(須藤, 2012)。この活動はFMわいわいの支援を受けており、FMわいわい自身もインターネットを通じた情報発信や臨時災害FM局への支援などを行った(金, 2012)。

多くの翻訳ボランティアが参加した活動の事例の一つとして、東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターによる「多言語災害情報支援サイト²」が挙げられる。同大学の教職員・OBOGによる翻訳ボランティ

¹ 法務省. 災害救助法適用市町村の外国人登録者数(県別・国籍(上位20カ国)別), <http://www.moj.go.jp/content/000071815.pdf>

² 東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター. 多言語災害情報支援サイト, http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/tufs_disaster_information/

ア126人が、計21言語に災害情報を翻訳し、サイトに掲載していった(青山・杉澤, 2011).

支援活動の中には、SNSを通じて見ず知らずの人々が翻訳活動に携わったという活動が存在した。その例の一つが、「Japan earthquake how to protect yourself³」である。このサイトは、「地震発生時緊急マニュアル」というブログ記事を44言語に翻訳して掲載している。サイトを管理しているのは東京外国語大学の学生などであるが、翻訳にあたったボランティアは彼らの知り合いやその知り合い、更にサイトがSNSで共有される過程で興味を持った見ず知らずの閲覧者等、概算で100名程度に上ったという。最も多い時で11万アクセスを記録したほか、SNSを利用する有名人や各国大使館によって紹介され、多くの外国人の目に触れることとなった(Wakamonoiz編集部, 2011).

以上のように東日本大震災においては、発災当初から多言語による情報の提供がなされていた。こうした多言語情報支援は翻訳ボランティアによって支えられ、情報の発信・周知やボランティア募集でもインターネットやSNSが多用されていたことが分かる。

3. prayforjapan.jpの活動と経緯

多言語翻訳の活動は災害情報の提供だけではなく、日本語で発信されるメッセージ・エピソードの外国語翻訳や、外国語で寄せられたメッセージの日本語訳などを行う活動である。ここでは、その事例であるprayforjapan.jpについて記述する。

3.1. 発災後のソーシャルメディアと#prayforjapan

3月11日の発災以後、SNSを用いた個人レベルでの情報発信が盛んに行われた。TwitterやFacebookなどが個人間の安否確認や災害情報の共有において多用された。報道機関や行政機関などもSNSで情報を発信するようになり、それらを見た個人がSNS内で繋がりをもっている他者に対して情報をシェア(情報の再発信)するという行為が多く見られた。

災害情報だけでなく、メッセージやエピソードもSNSを通じて広く発信・シェアされた。14:46の発災から間もなく、Twitter上において「#prayforjapan」というハッシュタグ(検索に用いられる文字列)がついたつぶやき(投稿)が見られた。これらの多くは最初、海外からの励ましのメッセージであった。次第にこれが日本語のつぶやきにも用いられ、被災地を励ますメッ

セージや、発災後に起こった心温まるエピソードなどが「#prayforjapan」と共に投稿されていった。

この#prayforjapanを目にした2名の大学生が、こうしたメッセージやエピソードを集約して表示させるようにするWebサイトを考案し、発災後24時間以内でサイト「prayforjapan.jp」を立ち上げた⁴。立ち上げ直後は、#prayforjapanのついたつぶやきや画像を自動収集して表示するのみであった。しかし公開当日中には、Twitterにおいて「リツイート」機能によって広くシェアされていった「心に残るつぶやき」を収集・掲載するコンテンツを公開した。公開後48時間以内に300万アクセスを記録し、サイトは話題となった。

3.2. PFJ 多言語翻訳プロジェクトの活動

この「心に残るつぶやき」は日本のみならず海外からも注目を受け、開設者の鶴田氏は翻訳が必要であることをTwitter上で呼びかけた。これに反応し、翻訳を申し出た一人が発表者である。Facebookページに「いいね!」(賛同)を示したユーザーたちによって、3月13日未明から英・中・韓の3言語の翻訳が始まった。

翻訳に携わったのは、サイトを見るかSNSでシェアされた情報を見て集まった、お互いを知らない人々である。彼らはサイトを見ながら、Facebookページに翻訳文を書き込んでいたが、当初は翻訳済みの文が他者によって再び翻訳される現象が起こっていた。そこで発表者は各言語の翻訳状況をコントロールする「まとめ人」として、翻訳済み・未翻訳を整理する作業を行った。同時に、可能な限り多くの言語に翻訳をすることを目標として賛同者たちに翻訳作業への参加を求めた。こうして多言語翻訳プロジェクトが立ち上がり、翻訳開始から48時間以内に7つの言語の翻訳作業が開始された。同じ頃、翻訳作業を行うシステムを変更した。これに伴い、翻訳チームを再組織し、一方で新たな言語の翻訳スタッフをFacebookを通じて募集した。実際多くの申し出を受けたが、大半は英語話者であった。

日本語の「心に残るつぶやき」は日々少しずつ増えていったが、最終的に31名となった翻訳チームには、各自のできる範囲で翻訳をしてもらい、結果サイト立ち上げから1ヶ月で、日本語を含む13言語⁵を用意するに

³ Japan earthquake how to protect yourself, <http://nip0.wordpress.com/>

⁴ prayforjapan.jp, <http://prayforjapan.jp/>; 開設者は鶴田浩之氏(慶應義塾大学)と西尾健太郎氏(首都大学東京)の2名である。

⁵ 日本語, 英語, 簡体中国語, 繁体中国語(台湾語), 韓国・朝鮮語, フランス語, ドイツ語, スペイン語, イタリア語, ポルトガル語, スウェーデン語, オランダ語, ロシア語. なお, 下線部は, 前段落中に記した48時間以内に開始された7つの言語である。

至った。その後、サイトで紹介したコンテンツが講談社編集部の協力の下に、日本語・英語を併記した書籍『PRAY FOR JAPAN - 3.11 世界中が祈りはじめた日』として発売され、現在までに累計750万部を売り上げた。PFJが受け取った印税はすべて、被災地の子どもたちのための基金に寄付をしている。また2012年2月には、スマートフォン向けのアプリとしてこの書籍を電子化し、日・英の他に言語を加えて配信している。この電子書籍版の多言語化も、Facebookを通じてボランティアを募集し作業を行った⁶。

3.3. PFJにおける翻訳作業の特徴と課題

多言語翻訳プロジェクトは、当初2つの活動目的を掲げていた。1) 震災後も日本が温かさで満たされていることを伝えることで、海外から寄せられたメッセージへの感謝を示す、2) 日本に住む外国人達が最も理解しやすい言語で、安心感を与えるメッセージを発信する、ということである。これらは、書籍化や震災後の状況変化に伴い、現在では東日本大震災の記憶を世界に・後世に残す、というものになっている。ただ、「人々の心の不安を取り除く」という理念は変わっておらず、この点が他の多言語支援と大きく違う部分である。

この目的に基づいて、言語種を特定せずできるだけ多くの言語の翻訳を目指し、翻訳に携わるメンバーの募集はSNSを通じて広く行った。一方、翻訳作業の負担軽減と正確性向上のため、一つの言語あたりのスタッフ数は複数人とした。サイト上の翻訳作業では混乱を避けるため3名程度を上限としたが、電子書籍版の翻訳では、作業数が多いため上限を設けなかった。

PFJの多言語翻訳の特徴は、インターネット上の仕組みを用いて展開されたことである。翻訳ボランティアの募集のみならず、翻訳作業もインターネット上で完結させた。FacebookやブログシステムのWordpressを用いた翻訳、さらに電子書籍版翻訳ではGoogle Docsの表計算システムを参加者どうしで共有しながら翻訳を進めた。こうした特徴を持った最大の理由は、翻訳ボランティアは善意によって集まり、お互いの素性を知らない状態で作業をした、ということである。

だからこそ、翻訳進行上の課題も存在していた。例えば、翻訳ボランティアの作業量と質の問題である。翻訳ボランティアはプロではなく、現在の生活や以前の学習歴において、当該言語を使用している方々である。またボランティアでの参加なので、翻訳作業の強制をすることはできず、掲載されたつぶやきの個数は言語によってばらつきがあった。他方、翻訳ボランティ

アの作業に対する動機づけを高めることは、震災から日が経つにつれて徐々に困難となっていた。

4. 翻訳ボランティアへのインタビュー分析

上に記したPFJ多言語翻訳の特徴や課題は、「まとめ人」である筆者の認識において当初から存在していたが、翻訳ボランティアはこの活動についてどのように考えているかを明らかにするため、サイト翻訳に携わったスタッフにインタビューを行った。

4.1. 方法と調査の観点

インタビューは2011年5月初旬に実施した。対象となった翻訳ボランティアは、Webサイト翻訳に携わった31名のボランティアである。このなかで対面ないしテレビ電話を用いて、7名に対してインタビューを行うことができた。それぞれ、スウェーデン語、ポルトガル語、英語、イタリア語、中国語、韓国・朝鮮語、フランス語の担当者である。

インタビューの形式は半構造化インタビューを採用し、1) 言語の使用と翻訳、2) ボランティアの参加と体制、3) 海外から得た反応、4) プロジェクトが自身に与えた影響の4つについて設問を作成した。インタビュー時間は1時間を目安に、設問の進行よりもその場での会話の起こりに重点をおいて行った。録音とメモを基に、設問に照らし合わせながら分析を行った。

4.2. インタビューの分析から分かること

調査を通じて分かったことの中から、以下4つのことをここでは取り上げたい。

- 1) ヨーロッパの言語を担当した日本語話者は、英語版に基づくか、あるいはそれを参考に翻訳を行っていた。これは、サイト上で最も進捗が進んでいた言語が英語であること、当該スタッフは各言語よりも先に英語を学んでいたことなどが影響していたと考えられる。
- 2) 読み手を意識した翻訳をするほど、日本語と当該言語の語彙の違いや文化的差異の対応が困難であった。例えば、多くのつぶやきに含まれていた「泣いた」「涙」等の語彙の選択や、「困ったときはおたがい様」などの日本語特有の表現への対応が難しいとされた。その際は、意識を行ったり、注釈をつけたりすることで対応を図っていた。
- 3) 140字のつぶやきには省略が多発しており、それを補うことも困難となった。日本語は主語の脱落があ

⁶ 2012年2月には英語、中国語、台湾語、韓国・朝鮮語、スペイン語・イタリア語を収録した。2012年夏には、翻訳が完了したフランス語、ドイツ語、アラビア語を加えて再配信する予定である。なお電子書籍化においては97名が新たに翻訳ボランティアを申し出た。

るため、欧州言語の担当者は困難を抱えた。さらに140字にメッセージを収めるための語彙の省略が発生しており、文脈から判断して補う必要があった。

- 4) 翻訳に携わることで罪悪感や無力感を和らげ、外国語を通じて「何かできる」ことを強く意識した。プロジェクトには在外邦人の参加もあり、彼らは自身が国外で困難を抱えず生活していることに罪悪感を抱き、または自分では何もできない無力感を抱いていた。しかし「心に残るつぶやき」に接しながら、翻訳による支援を行っている実感を持つことで、そうした負の感情から解放されていた。

4.3. インタビュー結果の考察

結果の2)と3)は、短い日本語のメッセージである「心に残るつぶやき」を多言語に翻訳していく上での困難を示している。災害情報と異なり、メッセージやエピソードは事実だけで構成されている訳ではなく、むしろそれらを発した人々の感情が多分に含まれているため、本当に正しい語彙・表現選択を行うことは困難であるといえる。加えて、Twitterというツールの特性からくる翻訳の困難は、日本語という言語において更に増加するだろう。

そしておそらく、この翻訳上の困難が作業の手間を増やし、作業進捗のばらつきを生じさせた一つの要因となったと考えられる。その作業負担を減らす意味でもより多くの翻訳ボランティアが必要となるのだが、一方で英語の翻訳希望が多い事実は前章で述べた通りである。結果の1)はこの英語優位の傾向を支持するものとも捉えられるだろう。

結果の4)は、緊急時における多言語支援の意義に新たな側面を加えている。多言語による情報支援や心の支援は、被災外国人の生活支援と不安の払拭という点で意義があり、PFJは理念上これに加えて海外からの支援への謝意を表すという意義を持った。しかし4)から分かったことは、外国語翻訳の支援を通じて、ボランティア参加者自身が不安の払拭を図っているということであり、このことから多言語支援が非被災者の心の支援につながるという意義を見出すことができる。

5. おわりに

「心に残るつぶやき」を多言語に翻訳する支援活動の可能性と課題を、PFJという事例を中心に、緊急時の多言語情報支援の事例も交えて検討したが、こうした事例から得られた知見は、今後発生するであろう災害においても活かされることが期待できる。多言語による支援は、災害情報提供においても、心の不安の払拭においても、大変意義のある活動であるからこそ、

翻訳上の困難に留意しつつ、SNS等を活用しながら支援の活動自体を開かれたプラットフォームとすることで、多くの人々を支援することが可能になるだろう。また、不断の社会言語学の研究成果や知見を、災害等が起きた際に実際の活動に昇華していくことは、今後求められる姿勢であるといえよう。

謝辞

本発表の調査の実施においては、PFJ多言語翻訳プロジェクトの翻訳ボランティア7名の協力を得た。本発表にあたり、彼らをはじめとする翻訳ボランティアのメンバー、prayforjapan.jp編集部、つぶやきの投稿者など全ての関係者に謝意と敬意を表す。

参考文献

- 青山 亨・杉澤 経子. 2011. 日常の活動やネットワークを活かして災害情報を多言語で提供 – 東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター. 国際人流, 24(7), 7-9.
- 金 千秋. 2012. 阪神・淡路大震災から東日本大震災へ多文化共生の経験をつなぐ – 地域における多言語放送が多文化共生社会構築に果たせる可能性. *GEMC Journal*, 7, 36-47.
- prayforjapan.jp . 2011. PRAY FOR JAPAN – 3.11 世界中が祈りはじめた日. 講談社.
- 佐藤 和之. 1999. 震災時に外国人にも伝えるべき情報 – 情報被災者を一人でも少なくするための言語学的課題. 言語, 28(8), 32-41.
- 佐藤 久美・岡本 耕平・高橋 公明・田中 正造・山岡 耕春・宮尾 克. 2004. 「地震災害における外国人の被害と災害情報提供」『社会医学研究』 22, 21-28.
- 杉原 達. 1996. 阪神大震災と多言語放送 – ミニFM局の意義. 言語, 25(8), 88-93.
- 須藤 伸子. 2011. 東日本大震災の外国人被災者支援 – 仙台市災害多言語支援センターの活動から. 自治体国際化フォーラム, 262, 14-16.
- Wakamonoiz編集部. 2011. How to protect yourself. (2012. 7.1参照)
<http://wakamonoiz.wordpress.com/2011/10/06/how-to-protect-yourself/> .

連絡先

遠藤 忍 (えんどう し のぶ)
*慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科
Mail: enshino@sfc.keio.ac.jp
Web: <http://enshino.biz/>

インターネットを通じた「心に残るつぶやき」の多言語化

prayforjapan.jp多言語翻訳プロジェクト参加者への

インタビュー分析を通じて

慶應義塾大学 大学院 政策・メディア研究科
遠藤 忍 (enshino@sfc.keio.ac.jp)

発表の 目的

インターネットで震災関連情報を多言語に翻訳する支援活動の課題と可能性を検討する

- ・ prayforjapan.jpを事例として紹介し、過去の震災と東日本大震災における取り組みを含めて意義を提示する
- ・ prayforjapan.jpの活動における課題と可能性を、参加者へのインタビューに基づいて検討する

過去の震災における多言語支援の事例

○FMわいわい

- ・ 「FMヨボセヨ」：神戸市長田区在住の在日コリアン向けのFM放送。
- ・ 「FMユウメン」：ベトナム語をはじめ、6つの言語によるFM放送。
⇒ 2局が合併して8カ国語による放送を開始。

○「外国人にも伝えるべき情報」67種類

- ・ 佐藤(1999)による、震災後72時間のラジオ放送分析による種別。
- ・ 「非日本語話者にも分かってもらえる日本語表現で」提供されるべき。

母語での生活情報の提供・不安感情の払拭が目的

東日本大震災における多言語支援活動の実例

○仙台市災害多言語支援センター（仙台国際交流協会）

- ・ FMラジオの放送や避難所巡回による情報提供のほか、インターネットを用いて災害情報を翻訳・発信。
- ・ 職員や「災害時言語ボランティア」たちの手で運営するだけでなく、FMわいわいからも支援を受ける。

○多言語災害情報支援サイト（東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター）

- ・ 大学の教職員やOBOGによる翻訳ボランティア126人が、計21言語に災害に関する情報を翻訳・掲載

○Japan earthquake how to protect yourself

- ・ 「地震発生時緊急マニュアル」を44言語に翻訳して掲載し、最多時で11万アクセスを得た
- ・ 翻訳ボランティアは大学生の友人関係、SNSで活動を知った閲覧者など、100名程度の見ず知らずの人

インターネットを通じた情報提供・翻訳ボランティアの活躍

prayforjapan.jpの活動と経緯

○SNSのひろがりと#prayforjapan

- ・ TwitterやFacebookなどのソーシャルメディアが、個人間の安否確認や災害情報の共有において多用される。
- ・ 報道機関や行政機関の情報のシェア(再発信)が多発する。
- ・ 人々を励ますメッセージや、震災後に起こった心温まるエピソードなどが、ハッシュタグ(検索タグ)「#prayforjapan」と共に国内外から数多く発信される。

○prayforjapan.jp立ち上げと翻訳の開始

- ・ #prayforjapanのついたつぶやきや画像、広くシェアされた「心に残るつぶやき」を集約するWebサイトを2名の大学生が考案。
- ・ 3/12に公開して以降、48時間以内に300万アクセスを記録。
- ・ 「心に残るつぶやき」は日本のみならず海外からも注目を受け、翻訳の必要性が高まり、Facebookを中心に翻訳作業が開始。

SNSで急速に広がった翻訳プロジェクト

○prayforjapan.jp翻訳プロジェクト

- ・ 3/13 英・中・韓での翻訳が開始。
Facebookの閲覧者たちによって翻訳が行われる。
- ・ 3/14 翻訳衝突が発生。発表者が「翻訳まとめ人」として翻訳済み・未翻訳の整理を実施。
同時に、可能な限りの多言語翻訳を呼びかけ。
- ・ 3/15 7つの言語に翻訳作業が拡大。
翻訳の作業をFacebookから別システムに移行。
- ・ 4/11 31名の翻訳者により、13言語でコンテンツ提供。
日本語、英語、簡体中国語、繁体中国語、韓国語/朝鮮語、フランス語、ドイツ語、スウェーデン語、オランダ語、ロシア語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語
- ・ 4/25 日・英2言語表記で書籍化。同内容の電子書籍版が多言語版を収録して2012年2月に発売。
電子書籍版の翻訳までで97名の翻訳ボランティアが参加。累計750万部の売り上げは、全額被災地に寄付された。



PFJの翻訳作業の特徴と課題

○SNSを活かした多言語翻訳

- ・ 海外からの支援への謝意の提示、被災地の外国人の不安の払拭、震災後の出来事の記録、という目的に基づき、言語種を特定せず募集。
- ・ お互いの顔を知らない参加者が、善意により参加。
- ・ インターネット上の仕組みを用いた翻訳作業の実施。
 - ・ Facebookページを用いた翻訳ボランティアの募集。
 - ・ Google Docsを用いた翻訳作業。(※参加者全員で作業データを共有)
- ・ 参加者の言語レベルは問わずに募集した反面、負担軽減・性格性向上のために、一つの言語について複数名の担当者を設置。

○ボランティアによる作業における課題

- ・ プロの翻訳家ではなく、学習・生活での使用を前提としており、そのレベルを押し量らず募集、翻訳量が言語によってばらつく。
- ・ ボランティアのため作業強制ができず、震災後時間が経つにつれてボランティア参加者の動機づけを高めることが難しくなってきた。

SNSによるボランティア参加が特徴かつ課題

翻訳ボランティアへのインタビュー

○対象・方法・観点

- ・ 2011年5月初旬に実施。
- ・ Webサイト翻訳に従事した31名中7名。
 - ・ スウェーデン語、ポルトガル語、英語、イタリア語、中国語、韓国語/朝鮮語、フランス語
- ・ 面接型ないしテレビ電話を利用。
- ・ 半構造化インタビューにより、以下の観点から質問を行った。
 - 1) 言語の使用と翻訳
 - 2) ボランティアの参加と体制
 - 3) 海外から得た反応
 - 4) プロジェクトが自身に与えた影響
- ・ 録音およびメモに基づき、回答を分析。

○インタビューの結果

- ・ 英語版に基づく翻訳の実行が、欧州言語において見られた。
- ・ 英語版が最も進捗が良く、ネイティブ話者の参加で質が高かった。
- ・ 欧州言語担当者は英語を第1外国語とする人が多かった。
- ・ 語彙や文化的差異の対応が、読み手を意識すると困難。
- ・ 感情を伴う表現や、日本語特有の慣用表現への対応が困難だった。
- ・ 参加者は意識の実行や注釈による対応を行っていた。
- ・ 140字の「つぶやき」には主語や語彙の省略が多発していた。
- ・ 主語脱落への対応や文脈判断による補充の必要性があった。
- ・ 外国語を通じた支援の可能性から、無力感を払拭していた。
- ・ 特に在外邦人が抱いた罪悪感が、支援の実感から払拭された。
- ・ 参加前は、自身の外国語スキルが支援に繋がると思っていなかった。

メッセージ・エピソードに含まれる「感情」が翻訳を困難にする
ボランティア参加者自身が不安の払拭を図っている

発表の まとめ

- ・ インターネットを通じた震災情報の多言語化は、被災外国人への母語による生活情報提供、不安感情の払拭という意義だけでなく、外国への謝意表明や状況伝達、翻訳に参加したボランティアの支援実感につながる。
- ・ 東日本大震災ではSNSを通じた多言語化が行われ、発信ツールの利用だけでなく、SNSを通じた翻訳者募集が行われた。
- ・ SNSを通じて行われた多言語化の活動は、SNSの特徴が課題と隣り合わせであった。特にSNSで発信された情報の短さや、「感情」を伴うメッセージ・エピソードを日本語から外国語に翻訳することが困難であった。

参考文献

青山 亨・杉澤 経子. 2011. 日常の活動やネットワークを活かして災害情報を多言語で提供 - 東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター. 国際人流, 24(7), 7-9.
金 千秋. 2012. 阪神・淡路大震災から東日本大震災へ多文化共生の経験をつなぐ - 地域における多言語放送が多文化共生社会構築に果たせる可能性. GEMC Journal, 7, 36-47.
佐藤 和之. 1999. 震災時に外国人にも伝えるべき情報 - 情報被災者を一人でも少なくするための言語学的課題. 言語, 28(8), 32-41.
佐藤 久美・岡本 耕平・高橋 公明・田中 正造・山岡 耕春・宮尾 克. 2004. 「地震災害における外国人の被害と災害情報提供」『社会医学研究』 22, 21-28.
杉原 達. 1996. 阪神大震災と多言語放送 - ミニFMの意義. 言語, 25(8), 88-93.
須藤 伸子. 2011. 東日本大震災の外国人被災者支援 - 仙台市災害多言語支援センターの活動から. 自治体国際化フォーラム, 262, 14-16.
prayforjapan.jp. 2011. PRAY FOR JAPAN - 3.11 世界中が祈りをこめた日. 講談社.
Wakamonoiz編集部. 2011. How to protect yourself. (2012. 7.1参照) <http://wakamonoiz.wordpress.com/2011/10/06/how-to-protect-yourself/>.